

明治期英書の日本

—朝鮮とミカドの帝国—

山下 英 一*

Japan in the English Books in the Meiji Era

—Corea and the Mikado's Empire—

Eiichi YAMASHITA*

歴史家よ

きみの筆は追いまはす——腹藝の番茶狂言や、からくりの外交を、

だけれどきみは知るまい

たんぼの畦みち

牧場を吹く風のそよぎに

まことの歴史のかくれてゐるのを——。

李光洙 「歴史家」(金素雲訳)より

1

米国で最初に朝鮮について書かれた一冊の本から、朝鮮の近代史と日本の維新から明治15年頃までの歴史の密接な関連を学ぼうとするのが、この小文のねらいである。この本というのは、米国人、ウィリアム エリオット グリフィス(1843～1928)が著わした『朝鮮』である。(Griffis, William Elliot. "COREA The Hermit Nation", New York: Charles Scribner's Sons, 1882. 426pp.) この出版の年は、朝米修好条規調印の年であった。したがってグリフィスがこれを著わした意図は汲み取れるが、とくに最後のページは次のように終わっている。

すなわち、あらゆる危険に囲まれた中で、この小王国の領土が保持されるように我々は希望する。しかし世界の地図上でいかなる問題が生じようと、朝鮮いや、アジア全体から、偶像崇拜、狂言、迷信が消えることを期待しよう。そしてそれらに代わって、イエスの宗教、科学、教育、人間愛が永遠の住まいを見つけることを期待しよう。

*外国語教室 (Department of Foreign Languages)

この文章にある「人間愛」は、原書では‘human brotherhood’となっていて、グリフィスが広く人道的立場で朝鮮の近代化に期待していたと見られる。ここでグリフィスについてこの小文の参考になると思われる点にいくつか触れておきたい。

1871(明治4)年、福井藩に雇われ藩校で理化学を教えた(同年3月から翌年1月まで)。ラトガース・カレッジ(現ニュージャージー州立大学)で古典学と理学を修め、ニューブランズウィック神学校に在学中に、福井藩から招聘を受けて来日した。教師としては実験室を設置して、生徒に科学の何たるやを学ばせた。主だった役人と福井の教育や社会の制度について議論した。学校の仕事の余暇にはほとんど外出して、地方に住む日本人の実際の暮らしぶりを見てまわった。他方、グリフィス自身の生活は、異教徒の地にあって、一人のキリスト教徒としてクリスチャン ライフを守ることにあった。宣教師ではなかったが、藩の建てた洋風の家で、住込みの数人の生徒と日曜日の朝は聖書を読み、讃美歌を歌った。グリフィスの授業が軌道に乗り始めたころ、7月に全国の藩が廃止され、藩は天皇の明治国家の下に県として統轄されることになった。給料の支給は藩から明治政府に移った。東京の官立の大学、南校がお雇い外国人を教師に採用し、全国から優秀な生徒を貢進生として入学させた。グリフィスもその南校に引き抜かれていった。近代化の過渡期の渦中にいて、グリフィスの東京生活はお雇いの条件に齟齬をきたし、3年後に帰国した。それでも開成学校(南校改め)では法律、理学、工学の生徒延べ93名に歴史、化学を教授、明治天皇の天覧授業で化学実験、英語教科書ニュージャパンシリーズ五冊の出版、アジア協会で2つの論文を発表、明六社通信員として洋学者と交流、The Japan MailやThe Japan Daily Heraldなどへの寄稿、横浜のブラウン博士やカローザス師の説教の仕事を助け、福井で教えた生徒たちと日曜日の朝のバイブルクラス、そして姉マーガレットと東海道・京都・福井・金沢・中仙道を旅行するなど、つとめて日本および日本人への関心を深めていた。1875(明治8)年、グリフィスはユニオン神学校に入学。5年の日本経験を踏まえて日本の歴史と明治日本について書き、在学中に『皇國』“The Mikado's Empire”(1876)と題して出版した。1877(明治10)年、神学校を卒業して、グリフィスは念願のオランダ改革派教会(ニューヨーク州スケネクタディ)の牧師になった。1879(明治12)年、キャサリン・ライラ・スタントンと結婚した。

『皇國』は日本の開国とその後の近代化について書かれた最初の英書として、米国で大好評であった。おそらく著者はこの勢いに乗じて、『朝鮮』執筆の準備に取りかかったものと思われる。牧師の職と美しい伴侶を得て、40歳に近いグリフィスはもっとも精神の充実した年齢にさしかかっていた。しかもその朝鮮の近代は、日本が内部からすでに崩壊が始まっていた折しも折り、外からの刺激によって開国に至ったのに対して、仏国を始めとするヨーロッパ諸国の宣教師の伝道による朝鮮内部へのキリスト教の浸透が、大いに影響していた。グリフィスはこのことに着眼した。しかし日本の場合と違って、一歩も朝鮮には足を踏み入れたことがなかった。これについて著者は序文のなかで、むしろ自分を編集者の立場に置いて、経験者が語る魅力はなくなるが、その語り手より有利な面もあると、このように弁解していた。

いろんな時や場所での、多くの目撃者の様々な報告を前にして、編集者は問題全体を眺め、多くの細部の印象を、相互に誤りがあれば訂正して、一つにまとめる。旅行者は普通、一度にその国の部分しか見ない。その点、編集者は、部分的にも扱う出典を思いのままにできて、文学的評価の技術が多少とも初学者のいきを出ていれば、より価値のある知識をもちこんだ旅行案内書を、一般読者に提供できるかもしれない。

実際、この英書のBibliographyには、ざっと75の参考書目が並んでいる、主要な資料には星印*がついていて、なかでもHistoire de l'Eglise de Coree, par Ch. Dallet. 2 vols. 8vo, pp. 982. Paris, 1874. は、とくに朝鮮におけるローマカトリック教の伝来と発展の歴史と1784年から1866年にかけての仏国宣教師の仕事に関する正確な知識に富んでいて、それに負うところが大きかったようである。

2

旅が大好きであるが旅行作家ではなく、牧師であるが宣教師ではなく、文学的鑑賞眼があるが作家ではなく、民族の歴史に関心があるが歴史家ではなく、新聞や雑誌に頻繁に寄稿するが文筆屋ではない、いろんな顔を持つ人物の一人にグリフィスがいた。現代人のように専門と称してこれらの一部を担って仕事をする時代と較べて、少なくとも、19世紀におけるa literary manは、これらすべてを一身に集めて、その視点で物を書く仕事をする人のことであった。であるからグリフィスの『朝鮮』は、現代の歴史感覚で読むには物語風なところがあって、a narrative historyと呼ぶにふさわしい。人類の進歩を標榜するキリスト教文明がやがて批判を生んで、ようやく蔭が見え始めた。そういう時代にしてはグリフィスの歴史の見方には、楽観的なところがある。しかしそれはキリスト教をpersonality(個人)のconscience(良心)の問題として、その生活に生かしてきたグリフィスの、生き方からくるものであった。

お雇い教師として福井に住んでいた頃、グリフィスは敦賀と三国に3、4日を過ごした。これらの港に立って眺めると、海に向こうの大陸からやってきて、この越前の海岸に上陸した、古代からの漂流民、移住民、冒険者のあったことを思うと、深い感動をうけたという。朝鮮と日本はそこに住む人々の生活、習慣、信仰および歴史の上で、互いに影響し合ってきた。だから朝鮮からの報告で、目撃者本人にも分からないと思われる多くのことが、日本の生活と歴史に精通していれば外国人にも完全に明白なものになるであろう。つまり、日本を除外して朝鮮の歴史を書くことは不可能に近いと述べる。

1873(明治6)年1月、ミカド(明治天皇)に拝謁した時、グリフィスはミカドの玉座の足元に、二匹の犬が尻をおとし、前脚を立て、座っているのに気がついた。大きく開けた口、ふさふさした巻き毛(とくに首の前あたりの)、二股に分かれた直立の尻尾の先。このこわそうな二匹の動物は「朝鮮犬」'Corean dogs'と呼ばれた。どんな理由でそこに置かれていたの分からない。一つには、神功皇后が新羅征伐の証言のなかで、新羅王を「日本の犬」と呼んだからか。過去において



Thos. Swinard & Son, Lith. Philadel.

W.E.Griffis "Corea, Without and Within" 1885

忘れられてしまった何かの象徴なのか、それとも日本の政治において、昔から基本的見解になってきた朝鮮の隷属を象徴しているかも知れない。玉座の犬に日本の属国(a tributary and dependency)としての朝鮮を見たグリフィスの鋭い直感はおもしろい。

もともと日本における朝鮮人の歴史は二つに分かれていた、とグリフィスは述べる。平和な時代に自発的な移民として、日本に来た朝鮮人は、大抵は技術を持った職人、または農夫で、かれらは許可された土地や村に定住して、ミカドの国の人々と政治的にも、社会的にも平等の立場に置かれていた。かれらは産業を興し、日本人と結婚して、朝鮮人という身元は日本人の大多数の

なかに埋没して行った。他方、戦争で捕らえられたり、徴兵を強制された朝鮮人の場合は大いに違っていた。初めは日本人並に扱われることはなく、ミカドの鷹狩りの鷹に餌をやるような、卑しい仕事に従事させられた。そのうち殺生を禁じる仏教の非難のために、朝鮮人に畜生の肉や皮を扱う仕事のお鉢がまわってきて、犯罪人の死体の処理などの仕事もやらされるようになった。

『朝鮮』の組立は、第1部。古代史・中世史、第2部。朝鮮の政治・社会、第3部。近代史・現代史から成っていて、その第1部第8章‘Japan and China’のなかに、上に書いたようなことが出ている。しかしすでにグリフィスは『皇國』において、朝鮮人は柔和で、平和を好み、戦争への覚悟がまったく出来ていないところにもってきて、外敵の侵入を挑発するようなことは微塵もなかったと言う。であるから不名誉な終結になった秀吉の略奪的朝鮮征伐は、平和な民族に対する非道な行為に他ならなかった。ところが日本の一部の人は、朝鮮を日本の一部であると思っていると、グリフィスは明治6年の征韓論を暗に批判した。さらに明治日本がウラルアルタイ語族の思想、道義、文明から離別して行くのを、他のアジアの国は、軽蔑、嫉妬、驚異をもって見た。すなわち中国は怒りを半ば露にし、朝鮮は公然と反抗を示して、日本が「外国の悪魔」に盲目的に服従していると言って嘲笑した。このグリフィスの表現の裏に、日本の開国と近代化に反発した、朝鮮の摂政、大院君(1820~1898)の天主教の弾圧と鎖国攘夷策に対する批判があった。

グリフィスのこの二冊の大著『皇國』と『朝鮮』の出版の間には6年の歳月しかないが、その間を中心にその歴史的背景を事項ごとに列記してみよう。

1839(天保10)	キリスト教弾圧、フランス人神父ら処刑(己亥教獄)
1846(弘化3)	最初の朝鮮人神父・金大建が殉教
1863(文久3)	高宗即位、高宗の父・興宣大院君(李昰応)、実権を握る
1866(慶応2)	大院君のキリスト教大弾圧(丙寅邪獄)、神父リデルの要請でフランス艦隊が江華島に侵攻 アメリカ商船シャーマン号、朴珪寿の指揮により大同江で撃沈される(丙寅洋擾)
1868(明治1)	ドイツ人オッペルトによる南延君墓盗掘事件
1869(明治2)	日本の王政復古を通告する国書の受理を拒否
1871(明治4)	アメリカ艦隊、江華島に侵攻(辛未洋擾)
1873(明治6)	大院君下野、閔妃ら閔氏一族へ実権移る 日本で征韓論起る(西郷隆盛と大久保利通・木戸孝充らが対立)
1875(明治8)	日本艦、江華島に侵攻(江華島事件)
1876(明治9)	日朝修好条規調印(日本側全権・黒田清隆)
1882(明治15)	米・英と修好条規を締結(アメリカ側全権・シューフェルト)
1884(明治17)	甲申政変起る 金玉均・朴泳孝・洪英植ら開化派がクーデター 閔氏政権首脳を襲撃 『朝鮮人物事典』(大和書房、1995)

付記。その1。朝鮮の英語表記であるが、グリフィスはCoreaになっている。しかし1886年に出版のローエル (Lowell, Percival 1855~1916) の“Chosŏn: The Land of The Morning Calm—A Sketch of Korea”ではKoreaになった。ローエルによると、同書の序文で、それは学者の合意によるものであった。

その2。朝鮮のことを誰がいつごろ、英語でThe Land of Morning Calmと表現したかは分からない。ローエルがその書名に使ったが、その前にグリフィスが『朝鮮』の序文でこの美しい英語の古称を紹介していた。

3

今日の韓国は、プロテスタント・キリスト教徒の比率がアジアでもっとも高い。信徒教は600万人以上、カトリック教徒と合わすと、キリスト教人口は、国民のほとんど四分の一を占める。(『韓国 民主化への道』池 明 観, 1995) 朝鮮の米国人宣教師ハルバートは、その著者“The Passing of Korea” (1906) のなかで、日本のキリスト教はたいして進歩をしていないと前置きして、このように述べた。日本人は西洋文化をその泉にあたるまで掘ろうとしない。あらかじめ水槽を作って、その中にすでに出ているより明白で確実な結果を貯蔵する。日本は近代国家になったが、それは回り合せがよかった (a happy combination of circumstances) からだ。朝鮮人社会は包括的、不変的、かつ同一的組織であるので、社会がよくまとまり、実にねばり強い頑固な生活を営む。であるから、この国では取るに足りない風習に手をつけないで、その社会の一見してわからない道徳と基本原理にまで手をくだす。すなわち、この国の内部の変容から始めて外へ働きかけるようにすべきである。とこう提案している、朝鮮名が轄甫というハルバート (Hulbert, Homer Bezaleel 1863~1949) は、グートマス大学を卒業、1886年、教師として朝鮮に渡った。朝鮮で最初の王立洋学校として1886年に育英書院が設立されたとき、招聘されたのである。1893年に宣教師として、再び朝鮮を訪れ、終生、宣教活動と朝鮮独立のための言論活動をした。(『朝鮮人物事典』, 姜 在 彦『朝鮮の歴史と文化』大阪書籍, 1987)

朝鮮人の驚くほどのねばりと、頑固な生活ぶりが、統治者による幾多の迫害や弾圧にもかかわらず、その国をキリスト教信仰の根強い国にした、とも取れるハルバートの意見がある一方で、朝鮮におけるキリスト教の急速な発展は、その国の生活習慣にあるのではないか、とグリフィスはフランス人グレーの意見を踏まえて、次のように述べる。

どの家にも、通りに開け放しの部屋がある。その部屋に友人、知人、未知の人など誰彼となくやって来て、新しい情報を取り交わしたり、出来事について話し合う。秘密を守ること何もない。この国の人はおしゃべりでなまけものなので、どんな出来事の情報も、新しい思想の表現も、燎原の火のように広がる。

だからとグリフィスは続ける。キリスト教のような驚くほど新しい教義が、とくにそれがすでに

その道で有名な人の説教になると、直ちに人民の好奇心を刺激して、人の口から口へと伝わって、まもなく多くの人の心を鼓舞する。大抵の場合、新しい炎はすぐに消えて、火のあったことを物語る灰もほとんど残さないが、信仰によって改造された命の着実な輝きは、責苦や死を目前にしてもその色を失うことはないであろう。これらの文章は、1800年における朝鮮のキリスト教徒は概算して4,000人に達したという、『朝鮮』のなかの記事の「注」として書かれた。

先に、ローマ・カトリック作家グレーの‘Histoire de L'Eglise de Coree’（『朝鮮教会史』）は、朝鮮におけるキリスト教の始まりから1866年までの、約82年間にわたる伝道人宣教師の活動を記したものと述べた。まず、グリフィスがこれを下敷きにして書いた部分を、『朝鮮』から見て行くことにする。最初にキリスト教弾圧の犠牲になったトマス・キム（外国名のキリスト教徒はforeigner-Coreansの汚名が着せられた）は、先祖の位牌を燃やした罪で裁判にかけられた。キムは折檻されたあと、追放された先で死亡した。位牌に香をたいていては、朝鮮人はキリスト教徒にはなれなかったのだ。1832年、プロシア生まれの宣教師ギュツラフ（the Rev. Charles Gutzlaff 1803～1851）が、東インド会社の英国船で東シナ海沿岸伝道旅行の途中、朝鮮に寄った。その時、王にその役人を通して聖書と宗教上の小冊子を贈ったが、受理されなかった。ギュツラフにキリスト教や改宗者の痕跡が見えなかったのは、行政長官がいつわって、キリスト教信仰のあることすらまったく知らないかと拒否したからであった。日本では、このギュツラフは最初の日本語訳聖書『約翰上中下書』の著者として知られている。

訪問、ミサ、説教と活発に続いて、1838年のキリスト教徒は9,000人になった。ところがその翌年の1月16日になって、憲宗王の名においてキリスト教根絶のために、数百人の容疑者が一度に捕らえられて、裁判にかけられた。数日のうちに、信徒の指導者三人が斬首され、女子供二十人が殺された。これ以上の流血を食い止めようと、フランス人司教アンペールは同僚のモーバンとシヤスタンとともに自首して出た。裁判にかけられ、幅広の板で66回ぶたれたあと、1839年9月21日殺害された。（己亥教獄）この処刑のまようを、グリフィスはこのように表現した。地面には死刑の判決文を書いた旗のかかった棒が立っている。死刑囚は手足をしばられ、上半身を裸にされ、腕と背中の中に棒を渡され、両耳にはそれぞれ羽根を上にして一本の矢が刺さっている。三人の死刑執行人が進み出ると、群衆から侮辱と嘲笑の叫び声上がる。

人殺したちは、囚人をからかうのに飽きると、その犠牲者の死に際の苦しみを楽にするために、刀を打ち降ろして、その首をはねた。首は板にのせて検死にだされ、死体は三日の間、晒しにされたのちに、川岸の砂中に埋められた。

漢江の川岸に埋められた死体は、ともに信仰も勇気もある三人の現地人のキリスト教徒によって持ち出され、7、8人によって二十日後にはソウルの北、約8マイルの地へ運ばれていく。

ペリー提督とその艦隊が東洋の近海に現れて、日本に文明のくさびを打ち込み、その鎖国の壁を倒壊しようとした、1853～54年ころ、ソウルの王室はペリーの動きについて知らされてはいた



Corean Officer.

Page 104.

W. E. Griffis "Corea, Without and Within" 1885

が、米国の旗はまだ朝鮮近海には現れなかった。1392年に築かれた朝鮮王朝は、哲宗の時代の1864で終りをつげた。子供がなく、王位継承者の指名のないままで、死亡したからである。宮廷内の政争の余波で、李昰応の次男(12歳)が高宗として即位した。王位に就くやいなや、眠っていた野心が、獅子の力に目覚めたようである。良心の呵責、同情、恐怖を知らないように見え、キリスト教、外国人、進歩を極端に嫌った暴君であった。国璽と王室の紋章をわがものにする大院君と

して、事実上の摂政になった。大院君のキリスト教大弾圧は、1886年3月に始まった。（丙寅邪獄）宗教の自由を守るためキリスト教徒が、露国の通商要求に対抗して仏英と同盟する計画案を大院君に進言したことで、国内に12名の仏国人宣教師が潜入していることが判明した。そのうち9名が逮捕されて、処刑された。リデル、フェロン、カレーら3人の宣教師が清国に脱出した。朝鮮半島には一人の外国人神父も残らなかった。また一人のキリスト教徒も公然と信仰を告白する勇気がなかった。その一方では、数千人の教徒が追放されたり、投獄されたり、殺されたりした。こうして、20年にわたり殆どとぎれない努力の後、教会は再び神父を奪われ、朝鮮のキリスト教82年の幕は流血のなかに閉じた。

4

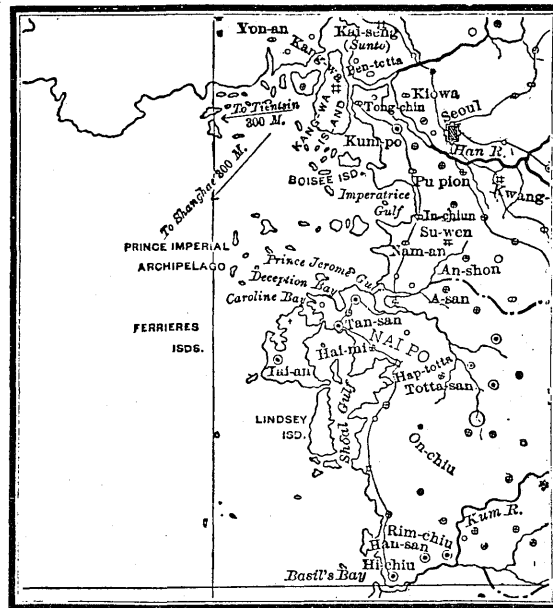
リデル(Ridel, Felix Clair 1830~1884)は、朝鮮における仏国人宣教師殺害の状況を、北京駐在の仏国公使ペロネーに報告して、ローズ提督の率いる仏国艦隊の出動を要請した。そのねらいは宣教師処刑の罪を問いただし、通商同盟を結ぶことにあった。フリゲート艦隊(28~60門の大砲を備えた快速帆走軍艦)1、コルベット艦(小型軽武装高速艦)2、公文書送達用の快速船2、小型砲艦2からなるこの遠征隊にリデルは水先案内と通訳をつとめた。兵士総数600、うち400は横浜の仏国軍基地からの派遣であった。1866年9月、リデルの乗った快速船と砲艦、それにコルベット艦の3隻が、漢江の河口にある江華島と半島の間の海峡を進む。刈り入れを前にして黄金色に実った稲田が美しい。素朴な村人たちは、帆や櫓がなくて流れの強い川をのぼる大きな黒船を見て、最初は驚いたが、そのうち岸に群がってきて、この西の海からやってきた火で脈打つ怪物を見物する。このように情感と緊迫感にあふれるグリフィスの文章が続くのだが、割愛しなければならない。

9月25日の夕方、漢江をのぼってきた快速船と砲艦の2隻がソウルの近くに停泊した。それはソウルを閉鎖して、米などの生活物資の供給を遮断し、7,000世帯を恐怖におとしいれることになった。リデルは岸において、キリスト教徒に会って、何か情報を聞きたいとねがった。しかし近付く勇気のある者はなかった。それに対し、大院君は武力による撃退を命じた。そして將軍家茂にその窮境を訴え、助力を求めたが、江戸幕府が外圧と尊皇攘夷の窮地にあって、しかもすでに修好通商条約を結んでいる(1858)仏国を敵にまわしての武力援助はできなかった。グリフィスによれば、幕府は朝鮮に外国貿易上の開港と外国との有効を勤めるよう二人の使節をソウルへ送る。ところが、將軍の死によってそれは実現しなかった。しかし江華島から本土に上陸した仏軍は通津で撃退され(10月26日)、江華島の仏軍もまた敗れて(10月27日)、進退きわまって約一ヶ月後に日本と清国の基地に引き揚げた。（丙寅洋擾）この勝利は大院君をして鎖国攘夷策を固めさせた。夷狄が朝鮮に侵入したのも、川の水が西洋の船に汚されたのも、キリスト教徒のせいである。かれらの血にその汚れを洗い流す義務があるという布告がでた。

1866年はまた米国と朝鮮の間で交渉が始まった年であった。①米国のスクナー（縦帆式帆船）、サプライズ号が、黄海道沖で難破した。仏国人に間違えられると殺される頃であったが、役人の

取り調べのあとは、食事、衣類、薬品、煙草を与えられて、よい待遇を受けた。大院君の命で安州まで馬で護送された。②天津の英国人商社に預けられた、米国人プレストン所有のスクナー、ゼネラル・シャーマン号は、大同江を平壤近くまで侵入した。朝鮮も北部の方では白人を見た者の数は少なく、外国の服装をしていると、仏国人と思われた。シャーマン号が仏国船と間違えられたか、乗組員全員は船の底に追いたてられ、船に火がつけられたという。平壤に向かったのは、そこにある朝鮮王朝の金の王の棺があると、清国で信じられていたからだともいう。

5



Map Illustrating the "China" Affair.

W.E.Griffis "Corea, The Hermit Nation" 1882

これまで見てきたところでは、摂政大院君の統治下における、一方ではキリスト教徒の増加、他方では仏国人宣教師の侵入が専制政体を脅かし、そのためにキリスト教根絶と、宣教師の処刑であった。仏国軍隊の出動となったが、それも撃退し、大同江に侵入の米国船もこれを焼き払い、朝鮮の情勢はますます攘夷と鎖国の主義を強固にするばかりである。しかし外国による干渉は実際にかえって深まっていくのである。1867年、ここにオッペルト遠征隊事件という奇妙な事件が起こった。グリフィスはこれを「死体盗掘遠征隊」と呼ぶ。大院君の父、南延君球の墓をあばこうとして失敗したことが明るみに出て、とくに首謀者の一人の米国人は、条件を結んでいない国に対して、不法で恥ずべき行為として公判にかけられた。その遺体を見せて、大院君から身代金をゆすり取ろうとした嫌疑がかけられた。遠征は北ドイツ出身でユダヤ系商人のオッペルト (Oppert, Ernest Jacob 1832~?), あの脱出した仏国人神父フェロン、米国領事館元通訳ジェン

キンズが企てたもので、その目的については三人三様の言い分があった。出発前のジェンキンスは、その目的をヨーロッパに朝鮮国使節を伴い、条件を締結し、米仏政府に朝鮮における外人殺害事件の釈明をすることにあるとした。オッペルトのその著書“A Forbidden Land: Voyages to the Corea”1880(ドイツ語からの英訳)には、流血を好む暴君大院君への見せしめが目的だとある。フェロンはというと、おそらく大院君からキリスト教弾圧の権力を奪い、開国の道が開けると思ったのだろう。

服部之総(1901~1956、マルクス主義歴史家)のエッセイ「撥陵遠征隊」(『黒船前後』大畑書店、1933)は、この事件の興味ある真相について書かれているが、それにはグリフィスの『朝鮮』(服部のいう『仙逸国民』)からの記述が大いにものをいっている。しかしその記述で、服部が見逃している重要な点がある。この事件によって朝鮮国民は、外国人による侵入の目的が死者を盗み、もっとも神聖な人間の本能を汚すことにあって、外国人は野蛮で、盗人であると確信するようになった。1871年に米国の旗を上げた船があらわれた時もすぐそういう目で眺めたとグリフィスは書いた。

ロジャース提督の率いる米国艦隊五隻が江華島に向かったのは、1871年5月であった。ジャンクで停泊中の艦隊に近寄って来た朝鮮の使者たちは、こころよく船中に迎え入れられた。そのときの写真には一ダースものビールの空きびんをかかえ、ボストンの絵入り新聞‘Every Saturday’を持つ、満足げな一人の使者が写っている。ビールびんには赤い三角形の商標がついていて、「文明の打ち込むくさび」と書かれている。しかし新聞の第一面にはヒューマニティの闘士、Charles Sumnerの肖像画が載っている。この奇妙な取り合せにグリフィスは驚く。実際にこの同じ年にグリフィスは、日本の大名の政府の一つ、福井藩の藩校でお雇い教師として理化学を教えている。閑話休題。しかし米国側が江華島に侵入し、シャーマン号焼き打ちに対する謝罪と、通商を要求すると、これを拒否する朝鮮側とで武力衝突が起こった。江華島広城鎮砲台では、朝鮮軍が米国陸戦隊と白兵戦を展開してこれを撃退した。(辛未洋擾)たしかに大院君にとってこの戦いは栄光をもたらし、朝廷の保守派は、米仏軍に戦いを挑んで損害をあたえ、これを撃退したと確信した。また一般に、米国人が仲間の海賊や盗人が殺されたその復讐にきて、



"The Entering Wedge of Civilization."

W.E.Griffis "Corea, The Hermit Nation"1882

打ち負かされて二度と懲罰に来る勇氣はないと思われた。他方、この戦いで米国海軍は兵士と士官の熱意、忍耐、紀律、勇氣が十分にためされたと、グリフィスは述べている。丙寅洋擾と辛未洋擾の二つの洋擾に勝利した大院君は、全国の主要道路や市の立つ広場に斥和碑を建てさせて、それにこう記した。「洋夷侵犯 非戦則和 主和賣国」(“The Western barbarians will come to invade our soil, there are but two alternatives for Cho-sen; to go to war, or to maintain peace, To submit peacefully means to sell the country; therefore we Koreans must resort to arms.”『朝鮮』p.437)反日的政治家とみられたが、大院君の反発は、日本人がキリスト教国の風俗に陶醉して、日本が西洋化された悪魔の国になったと考えたからであった。

しかし10年間におよぶ大院君の執政は1873年に終った。閔氏一族が大院君に不満の勢力と結託して、「国王親政」の名のもとに、大院君を隠退させたのである。鎖国攘夷から門戸解放への朝鮮の動きが始まる。それを日本との関係で見て行こう。1875年9月19日、漢江河口を航行していた日本軍艦雲揚号の乗組員が、水の供給に江華島に上陸したところ、朝鮮兵に仏国人と米国人に思われて発砲されるという事件が起きた。日本海軍はすでに軍艦も軍服もすべて洋式になっていたからである。21日、日本兵36名が元込め銃で、敵の要塞を攻撃して、そこを占領。23日に長崎に帰った。(江華島事件)翌年、参議黒田清隆が特命全権公使を命ぜられ、戦艦2隻、輸送船3隻を率いて漢江に入った。輸送船に砲門の絵を描いて戦艦に見せるなどの人目を引く隊伍を整えて威圧的な態度を取った。朝鮮から江華島事件の詫び状が提出され、「大日本」と独立国「大朝鮮」の間に、修好と開港の条約が調印された。(日朝修好条規調印、1876年2月26日)

これを受けて、朝鮮使節団、修信使金綺秀の一行が日本を訪問する。横浜に上陸してから約一ヶ月の滞在であった。

大国の象徴である鉄製の三叉の鉾を手にした海神ネプチューンのように勇敢な男たちが行列の先頭にたち、二十人の奏者の一団が金属の角笛、ほら貝、横笛、呼び子を吹き鳴らし、シンバルと太鼓を打ち鳴らして続いた。女々しい顔の小姓が条約議定書を運んだ。修信使は虎皮で覆われ、八人の男の担ぐ台に乗り、その頭上に一人の召使が豪華な傘をさし、四人の小役人がついて歩いた。残りの随員は人力車に乗り、日本の軍隊と官吏がその見せものの最後についた。

東京での三週間、朝鮮からの国賓は軍艦、工廠、大砲、水雷、学校、建物、工場、蒸気、電気の設備のついた役所を見せられて、おもしろがったり、啓発されたり、驚いたりした。しかしその後、ソウルで出版された使節団の公務日誌を見ると、あらゆる見解や判断を注意深く晒した無色の記述になっていると、グリフィスは書く。江華島事件に端を発した日朝間の条約は、日本国内の征韓論に支えられた砲艦外交によるとの見方が強いが、これによって釜山、元山、仁川の三港が日本に開港になり、やがてそれは米国にも及んで来る。

米国が朝鮮と条約を結ぼうとして、初めて、提督シューフェルト(Shufeldt, Robert Wilson

1822～1895)の率いるタイコンデロガ号が釜山港に入港したのは、1880年5月14日のことであった。シューフェルトは日本領事を介して、通商要求の文書をソウルに送ったが拒否された。しかし失敗のあとようやく清国の李鴻章から朝鮮開国の斡旋をうけて、1882年5月9日、朝米修好条規の調印に成功した。朝鮮は思想上、守旧派(Conservatives)、洋援派(Exclusionists)、鎖国攘夷派(Port-closers and Foreigner-haters)と、開化派(Civilization Party)、急進派(Progressionists)とに大きく対立した。こういうなかで1873年以来、隠退していた大院君が政権の復活を待っていた。1882年の夏は、①仁川の米人居留、②旱魃による米の不作の心配、③兵隊の給与の削減などの事情が絡まって、軍人暴動が起きた。(壬午軍乱)反閔、反日闘争のなかから大院君が政権の復活の好機が来た。しかし清国軍の武力介入による弾圧で大院君は監禁され、閔氏一族が復活、旧体制を固守した。当時の初代駐朝弁理公使、花房義質(1842～1917)は、仁川より英国船の助けを得て脱出した。こういう際の、清国最良と日本最良に分かれてのまじめな討論がいい意味で政治の邪魔をして、さらに国政に革命を早めることになった。その討論が生きることに目覚める前兆であるとグリフィスはいう。

6

グリフィスの“Corea: The Hermit Nation”『朝鮮』(1882年初版)はここで終わっている。その後、第3版(改訂1888年増補, 1889)、第7版(1904年まで増補, 502pp.)、第8版(1907年まで増補)、第9版(1911年, 526pp. price \$2.50)と版を重ねた。(Frances Yeomans Helbig“William Elliot Griffis: Entrepreneur of Ideas”1966) ‘Hermit’という言葉にグリフィスが託した意味は、「社会から引き隠ってしまっていて、孤立した状態で暮らす人」のことであり、‘The Hermit Nation’はその「社会」を「世界」に、「人」を「国」に置き換えた、グリフィス一流の文章表現であった。しかしグリフィスはまた、その朝鮮の人と社会について、その歴史から韓民族のすぐれた特色を述べ、キリスト教受容の大きな広がり重視した。この小論では、とくに専制君主制と外国の勢力の相克によって開国の動きが始まった朝鮮の近代について、一冊の英書を通して考えてきた。そのことが将軍と天皇の二重の政治構造を持つ日本が、いかにしての開国が始まったかについて考えてみることにしよう。

ここで、1882年の朝米修好条規調印の翌年の朝鮮使節団の訪米について、少し述べたい。正使閔泳翊の一行11名は、9月2日にサンフランシスコに着いて、シカゴ経由、ワシントンへ、ニューヨークでアーサー大統領に謁見する。米国政府および各州の大歓迎をうけ、近代施設、文物や制度を視察している。閔泳翊は閔妃の甥であり、守旧派の中心人物であった。米国人パーシバル・ローエル(Percival Lowell, 1855～1916)が秘書として同行した。これが機縁となって、ローエルは“Chosŏn, the Land of the Morning Calm—A Sketch of Korea”(Boston, 1886)を出版した。

最後に、グリフィスの『朝鮮』を読むのに、参考にした次の書物に感謝を述べたい。William Elliot Griffis“Corea, Without and Within”(Philadelphia, 1885)、Isabella L. Bird“Korea & Her Neighbours”(London, 1898)、W.E. Grittis“The Mikado’s Empire”(New York, 1876)、

H. B. Hulbert “The Passing of Korea” (New York, 1906) P. Lowell “Chosön, the Land of the Morning Calm” (Boston, 1886)

姜 在 彦『朝鮮の歴史と文化』(大阪書籍, 1987), 山辺健太郎『日韓併合小史』(岩波新書, 1966)

池 明 観『韓国 民主化への道』(岩波新書, 1995), 『朝鮮人物事典』(大和書房, 1995)。